「Echoes in Flowers」

花き装飾コース　新垣　和奏
（指導教員：林　誠）

１．はじめに

インターンシップⅢにおいて、実際の花屋の現場を体験したことで、自身の技術不足や判断の遅さを痛感する結果となった。その経験を通して、学校での制作と現場で求められる技術やスピードとの違いを強く意識するようになり、自身の実力を見つめ直す必要性を感じた。そこで卒業制作では、実力不足を自覚するきっかけとなった花束制作を中心に多くの作品を制作し、現場での即戦力として求められる基礎力と応用力の向上を目指すとともに、表現力を磨きたいと考えた。単に花束を制作するのではなく、想像力の向上を図ることを目的とし、明確な題材を設定したいと考えた。

そこで、私が日ごろから親しみ、繰り返し聴いている「楽曲」をモチーフとして取り上げることにした。個人によって解釈が大きく異なる楽曲は、既存のイメージにとらわれず、自身の解釈や感情をそのまま作品に落とし込むことに挑戦した。

制作では私が好きなアーティスト一人につき二曲ずつ、合計十曲を選び、それぞれの楽曲から受け取った印象や感情を私なりに解釈し、花束として表現することとした。タイトルである「Echoes in Flowers」には、楽曲が流れ終わったあとにも、心に残り続ける余韻や感情の響きという形のないものを、花という形があるものに宿らせたいという思いを込めている。

２．作品紹介

（１）「jane doe」

（２）「サマードッグ」

（3）「晴る」

３．卒業制作を終えて

制作を通して、技術面・思考面の両方において大きな成長を感じることができた。制作初期は、花材選びや構成を考えることに時間がかかり、花束一つを完成させるまでに多くの試行錯誤を必要とした。しかし、制作を重ねるにつれて、花の扱い方や配置の判断を感覚的に行えるようになり、花束を組むスピードが徐々に向上していった。制作を進める中で、花の種類だけでなく花の大きさや配色、配置のバランスによって花束全体の印象が大きく変化することを実感した。どの花を主役にするか、どの位置に配置するかを考える過程は、まるでパズルを組み立てているようで、創作の楽しさを強く感じる時間でもあった。この試行錯誤の積み重ねが、表現の幅を広げることにつながったと考えている。

自身の好きな楽曲を改めて聴きこみ、その歌詞やメロディ、楽曲から受け取る感情や世界観を丁寧に自己解釈し、花束の色味や形、使用する花材へと落とし込んだ。そして、楽曲のイメージと花束の完成形が重なったときには大きな高揚感があり、制作に対するモチベーションにもつながった。自分の「好き」を花束という形で残すことができたことは、非常に意義のある経験であった。

本卒業制作で培った制作技術や表現力、そして「相イメージを形にする」という姿勢を今後の花屋としての人生に活かしていきたい。自身の感性を大切にしながら、形のあるもの・ないものに関わらず、さまざまな人の「好き」や「想い」を花を通して表現し、形にすることで、誰かの日常に響くような花束を届けていくことを目標とする。